

# ハックルベリー・フィンと もうひとつのアメリカ

後藤和彦

「もうひとつのアメリカ」 アメリカを代表する作家とは誰か、そう問われれば、多くのアメリカ人が「マーク・トウェイン」の名をあげるだろう。彼の代表作は『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八五年）。物語は国土の中央を流れるアメリカ最大の川ミシシッピを舞台に展開する。大国アメリカの背骨と見たてられるミシシッピの長大さは、アメリカの自然の驚異的なエネルギーを抱えこんで泰然としている。釣り糸をたらずと体長二メートル、体重百キロのナマズが釣りあがる。

主人公ハックルベリー・フィン、神のような川を手なずけようとするのではなく、川に翻弄されるまま、かろうじて生きてゆく。それがアメリカの自然のなかで生き延びる唯一の

方法だからだ。大河の兩岸には、人間の作り上げた約束によって成立している社会があり、ハックは社会のいじましい窮屈さからその都度川へと逃げ帰る。川に浮かべた素朴な「いかだ」こそ、彼の「またとない家」となり、陸の上では得がたい自由が川によって保証される。小説『ハックルベリー・フィンの冒険』は、アメリカの神話的な自由をめぐる物語である。アメリカの国歌にも謳われる「自由なものの土地」の理想は、社会の拘束から自由な放浪児ハックによって、アメリカの奔放な自然の象徴、ミシシッピ川の上に達成される。

しかしながら、アメリカの神話的自由を描いた『ハックルベリー・フィンの冒険』という小説は、もうひとつの切実な「自由」をめぐる物語でもある。その「自由」とは、愛する家族から引き離され、見知らぬ土地に売り飛ばされることを恐れて逃亡した、黒人奴隷ジムの求める「自由」である。長大なミシシッピ川の上で達成されるアメリカの理想の自由と、ジムがハックの手を借りて得ようとする「自由」とは、質が大いに異なる。前者はミシシッピを下るいかだの上で、利那的に実を結ぶ、幻想的でまさしく神話的な自由であるのに対し、後者は法律や掟といった約束事で成り立っている陸の上の制度からの自由、つまり陸の上で獲得されなくてはならない「自由」だからだ。

建国以来、「自由ランド・オヴ・ザ・フリーなものの土地」であったはずのアメリカには、南北戦争（一八六一—一八六五年）が終結するまで奴隷制度が存在していた。またそれ以降も、白人には当然与え



ON THE RAFT.

図版1 『ハック・フィン』初版の挿絵 いかだ  
上のハックとジム (*Adventures of Huckleberry Finn* 1996,  
Oxford University Press)

られている政治的・社会的自由を黒人から剥奪し、彼らを「劣等人種」ないし「二級市民」という壁の向こう側に囲い込む制度は、「人種隔離制度」と名を変えて存続した。二十世紀中葉にアメリカ全土を吹き荒れた公民権運動の嵐によって、人種隔離制度は名目上終息することになったが、今日にいたるまで人種問題は依然として、アメリカ人のもっともセンシティブな問題のひとつであり続けている。彼らが神経質にならざるを得ないのは、人種の違い

よつて不当に自由を奪われているという意識がいまだに存在し、またそういう事実が今もなお存在するからだ。

「自由なものの土地」アメリカは、建国以来、常にその内部に「もうひとつのアメリカ」をはらみ続けてきた。アメリカにあつてアメリカならざる場所。それは奴隷制度を産業の基盤とし、生活や文化の枢要とした南部——「奴隷解放宣言」（一八六三年）によつて歴史に名を残した、エイブラハム・リンカーン大統領（一八〇九—一八六五年、南北戦争終結の年、暗殺された）率いる合衆国に、独立を期して反旗をひるがえし、足掛け五年におよぶ未曾有の大戦争に国土を巻き込み、敗北した「反逆者」南部——を具体的には指すと言えるだろう。しかし、南部の奴隷制度にもつとも端的にうかがえる、特に黒人に対する不寛容、徹底した管理、統制ないし差別を基底におく文化を、今、仮に〈南部〉という名前で呼ぶならば、現実の南部へと成長する〈南部〉とは、アメリカという国が自由と平等を謳い文句にして旗揚げしたときから、すでにその内部にめばえていた。そして同じ〈南部〉は、一八六五年に奴隷制度を保持する現実の南部が消滅した後も、依然としてアメリカの内奥に巣くい続けてきたのだとも言える。

ハックが最初に脱出した陸の上の社会とは、奴隷ジムの存在から見て明らかのように、南北戦争以前の南部の一端に所属する社会である。ハックとジムの逃亡の手段は、南へ下るミ

シシッピー川の流に身をまかす他ない「いかだ」であるから、ふたりの逃避行はいよいよ南部の奥深くへ分け入ることになり、兩岸には南部のさまざまな因習がパノラマをなして刻々と展開することになる。作品中ハックは、岸を支配する南部習俗のしがらみから、アメリカの理想の自由を具現するようなシシッピーのいかだの上へ、幾度も脱出を繰り返さなくてはならなくなる。

ハックは奴隷ジムの逃亡を手助けする。人を家畜同然にあつかう奴隷制度は非人道的であり、差別することは醜悪であると知っている私たち読者は、ハックの行為を正義の行為だと思ふ。むしろ、その当然の「正義」を遂行するにあたって、ハックがしばしば見せる逡巡や、「これでいいのか、いけないのか」と、ハムレットばりのディレンマに陥ることをいぶかしく齒がゆく思うかもしれない。しかも彼はそれを「良心の呵責」だとさえ言う。良心？良心とは人が「正義」を求める心の動き、誰の心にもある人間としての証のことではないのか？「正義」とは、この場合、ともかくにも困っている奴隷ジムを救うことではないのか？

私たちは「良心」とは、いや「正義」もまた、時代と社会の産物であることを知らなければならぬ。逃亡奴隷を自由へと解放する手助けを続けるか否か、最終的な決断を迫られるとき、彼を苦しめる「良心」とは、南北戦争以前の現実の南部がはぐくんだ南部の良心に他

ならない。奴隷制度とは神聖侵さざるべきもの、南部では教会でも学校でもそう教えていた。だから今、彼に求められるべき「正義」とは、ジムが逃亡奴隷であることを告発し、持ち主のもとに追い返すことなのだ。もと来た場所に帰れば、ジムはきつと無事にはすむまい。でもそれがこの社会が要請する「正義」のあり方なのだ。

先ほど、ハックは「社会の拘束から自由だ」と書いたが、それは結局、比較の問題に過ぎなかつた。南部の一コミュニティからドロップアウトした放浪児ハックにしても、完全に社会と縁を切つて生きてゆくことはできないからだ。ミシシッピに頼りなく浮かぶいかだの上で、自由と人種の融和という、すぐれてアメリカ的な理想を達成し、アメリカの子となり得るハックは、何よりもまず南部という社会の生んだ南部の子なのである。悩んだあげくジムを救い出す決意をしたハックの、「よし、そんなら、おらあ地獄へ行くだ」という言葉は、「非アメリカ」南部の子ハックが、理想のアメリカの子となろうとする壮絶な覚悟の言葉である。南部は縁を切るのに、「良心」をかなぐり捨て、「地獄におちる」決意を要求する土地だった。

南部の子、ハック・フィン　ハックのモデルとなつたのは、トウエインがミズーリ州ハニバルで過ごしていたころの友人、トム・ブランケンシップ少年であるという。トム少年の父は、

サウスキャロライナ州出身の人夫ウッドソン・ブランケンシップ。小説中、ハックの父がそうであるように、始終酔つ払つてばかりいる町の鼻つまみ者だった。ブランケンシップ家は、南部の社会階層中、白人では最下層に位置する「貧乏白人」<sup>プアホワイト</sup>で、まっとうな家の子どもたちはその家のものたちと交際することを禁じられていた。しかし、好奇心旺盛な腕白少年たちにとっては、むしろ親から禁じられているものの魅力こそあらがいがたい。トウエインは『自伝』のなかでトム・ブランケンシップについてこう記している。

彼は無知で、風呂にも入らず、いつも腹をすかせていた。しかし、彼ほど気のいい少年はまたといなかった。彼の自由は何からも妨げられることはなかった。町でただひとり——大人も子どもも含めて——誰からも指図を受けずに気ままに生きていた。だからいつも静かに自分を満喫していたし、私たちはみな彼がうらやましかった。

「誰からも指図を受けずに気ままに生きていた」トムは、南部に生まれ育ちながら、普通の南部白人に植えつけられる文化的偏向から、比較的自由であったはずだ。

黒人奴隷とはまた違う意味で南部社会の周縁で生きていた貧乏白人は、南部社会における被抑圧者という境遇を共有する奴隷たちと手を結ぶこともあった。貧乏白人はにせの「通行

証」(後述)を書いて、奴隷の逃亡を助けたり、ときには奴隷たちの暴動に加勢することさえあった。実際、トムの兄ベンソン・ブランケンシップは、町から逃亡してミシシッピ川に浮かぶ小島にひそんでいた奴隷に同情し、見つけたものには五十ドルもの賞金が与えられるのを知りつつ、こっそりと食料を運んでいたというエピソードを残している。つまり、貧乏白人は反南部的存在にさえなり得たというわけだ。

そんなトムをモデルにしたハックも、彼を育てた社会から完全に自由であるわけではないのなら、ハックはどの程度まで南部という社会の産物なのだろう。それは彼の父「フィン親父」を観察したところから、推測することができるようだ。実際、フィン親父はハックがいかなる社会的産物かを示すためにのみ作品に登場しているようにさえ見える。なぜなら彼は最初のわずか数章にいかにも騒々しく登場して、読者に忘れがたい印象を与えながら、以降はすっきり姿を消してしまい、作品の結末に死んだことが確認されるだけだからだ。

作品の第六章に、酔ったフィン親父が、酔っ払い特有の、誰に向かって語りかけるでもない、くだくだしい繰り言をする場面があるので、そこに注目してみる。彼は貧乏この上ないおれの不遇をぶちまけたいのだ。このみじめな境遇は政府のせいだと、彼はわめきたてるのだ。ちなみに、貧乏白人はまったくの無教養なものたちではあったが、彼らの政治への関心はきわめて高く、その無知ゆえの頑迷さゆえに、逆に手強くあなどりがたい政治勢力と



なることさえあつた。フィン親父の政府への不満は、結局、政府の黒人に対するあつかいが手ぬるいというところにつきる。「『おれは豚も着ねえようなぼろ服に、てっぺんがめくれて、あとはあごの下まで沈没しちまつた帽子をかぶつてるが、オハイオからやって来たあの自由な身分の黒んぼ（このアフリカ系アメリカ人を指す差別的な語は、英語 *negro* の訳語である。オハイオ州は奴隷制度のない「自由州」であり、奴隷の身分ではない黒人がいた）は、白いワイシャツを着こんで、ピカピカの帽子をかぶつてやがる。そいつは自分の州に帰れば、投票もできるんだそう。な。おれは金輪際、選挙にはいかねえぞ。なんであの黒んぼをせりにかけて売つぱらつちまわねえんだつて聞いたら、この州に来て六カ月たたねえうちには売れねんだと（当時のミズーリ州に実在した法律である）。これでもちゃんとした政府つて言えるのかよ』」。

フィン親父の言葉には、貧乏白人であるがゆえの過激な人種差別がある。その背景には南部独特のイデオロギー<sup>\*0</sup>が存在している。南部人は奴隷制度とデモクラシーが矛盾する存在ではないと考えていた。むしろ、奴隷制度によって、北部にはない真のデモクラシーが実現されているとさえ考えていた。つまり——南部では、比喩的に言う「奴隷労働」が文字どおり奴隷である黒人によつて行われる。一方、奴隷制度を擁しない北部では、同じ「奴隷労働」が白人労働者によつて担われる。したがつて北部には、資本家と労働者の間に同じ白人でありながら越えることのできない階級という差が生じる。南部人は、奴隷を多く抱えた

## コラム——基礎術語

**イデオロギー** 人が世界をながめるまなざしに、あらかじめ偏向を与えてしまう、特定の社会にしか通用しない観念のこと。世界全体は茫漠とし錯綜してあまりに大きいので、人はこれを理解可能な形に切り取って理解するのだが、そうやって世界を切り取る（分節する）際の型紙とかひな形のようなもので、その人が生きている社会に何らかの要因であらかじめ備わっているフィクションだと言ってもいい。たとえば「女とはなにものか？」というとても抽象的な問いに対し、「女とは、子を生み、外で仕事を持たず、家にいて家庭を守るもの」という答えが、ある社会の誰にとっても自然で穏当であるような場合、その世界観には一定の傾斜や偏向があることがわかるだろう。そのような社会固有の——大抵の場合、その社会の体制を維持温存するために必要な、という意味だが——世界観の構築を誘導する言論上の装置のようなもの。

大農園の所有者とフィン親父のような貧乏白人の間に、階級差が歴然と存在している事実から目をそむけ、黒人を最下層におくことによって、あらゆる白人間には原理的に階級差が生じ得ないと考えたのだ。この発想を「支配者民族内民主主義 (Herrenvolk democracy)」とも呼ぶ。こういうデモクラシー観があるために、南部の貧乏白人の多くは白人と黒人との差異に誰よりも敏感であったし、それをことあるごとに強調してやまなかつたのである。彼らは、境遇から言うならば、むしろ黒人奴隷に近いか、ないしはそれ以下でさえあったのにもかかわらず、豪壮な邸宅を構える土地領主ら富裕階級と、ただ同じ白人であるというだけで、連帯感

を抱くことができたし、それを何より望んでいた。

フィン親父の言動のうち、彼個人の資質に還元することが不可能なものは、こうした人種差別を正当化する政治イデオロギーである。そして、それに反発する自由を選択することなく、まさに絵に描いたような人種差別主義者である点で、彼が疑いなく南部の社会的産物であることがわかる。ということは、フィン親父からハックへと受け継がれ得る、南部人としての社会的な資質は、人種差別を当然と考える資質であると推論できる。果たせるかな、誰よりも「気のいい少年」であるハックは、実に気軽に「黒んぼ」を蔑視し続ける。以下にうかがわれるハックの黒人観は、当時の南部人が持たされていた常識的な黒人観を忠実に踏襲している。

たとえばハックは、ジムが「黒んぼにしちゃあ、まともな頭をもっている」と言うし（十四、十六章）、ジムに議論でまるめこまれたときは、くやしませに「だいたい黒んぼに理屈を教えることなんてできねえよ」と負け惜しみを言う（十四章）。また、逃亡の旅が順調に進むことに調子づいて、自由州にうまく逃げられたあと、妻や子どもたちをいざとなれば盗み出そう（ジムの妻も当然奴隷で、他人の所有物だから）という計画を興奮してしゃべり始めるジムを見て、「昔からの言い伝えにあるけど、『黒んぼをあまやかせば、つけ上げる』というのはこのことだ」と言っただけで自分が犯そうとしている「犯罪」に「良心」の呵責を覚え始め

る（十六章）。さらに、ジムを取り戻しにフェルプス農場にやって来たハックは、蒸気船のシンダーの頭が破裂したので到着が遅れたのだと嘘の言い訳をするが、驚いたサリーおばさんが「誰か怪我をしたのかい」と尋ねると、ハックは「『いいえいいえ、黒んぼがひとり死んだだけです』と答える（三十二章）。

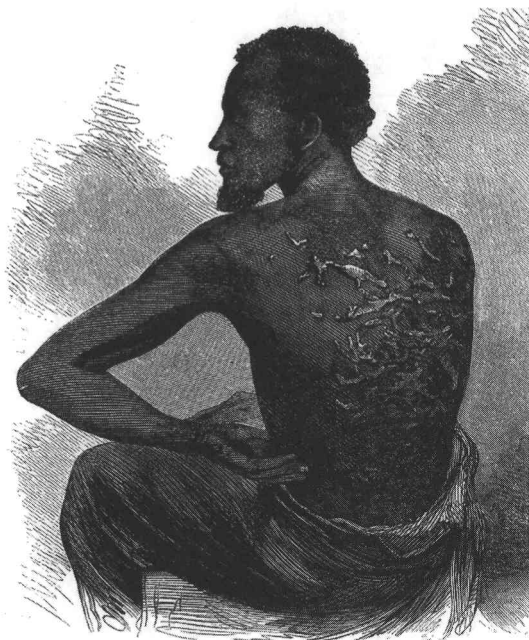
ハックは限りなく非南部的であり、反南部的でもあることが可能な環境に育ちながら、人種差別というただ一点において、フィン親父の息子にふさわしいあり方で南部社会の産物であるという刻印を押されている。トウエインは、そんなハックを逃亡奴隷ジムとふたり、川の流れに沿って下るしかないかだに乘せ、南へ下らせる。逃亡した奴隷を手助けするのであれば、本来向かうべきは北なのに、南へ、逆に南部社会のまっただなかをふたりは進む。「冒険」と呼ぶ他はないこの状況に、誰よりも「気の良い少年」ハックをあえて投げ入れ、肌の色の違いだけで人から自由も夢も愛するものとの絆も何もかも奪い去る、恐るべき〈南部〉というものの実体をじかに経験させる。そして人種差別という南部生まれの刻印を、ハックがみずから期待通り、拭い去ることができるよう仕向けるのだ。

**奴隷ジム、逃亡の行方** 放浪児ハックルベリー・フィンは、彼をつかまえて窮屈なことを押し付ける人のいないところであれば、どこへ逃げてかまわなかった。しかし、同行のジム

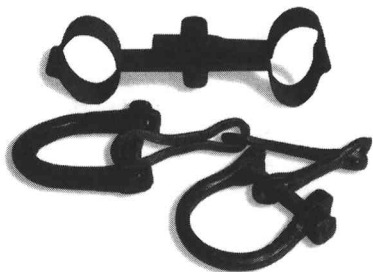
はそういうわけにはいかない。彼はなんとしても奴隷制度のない自由州へと逃亡しなくてはならない。当時、奴隷はその持ち主の用事で外出しているという、持ち主の署名入りの「通行証」がなければ、決して遠出は許されなかった。ジムは逃亡しているのだから、当然そんな書類を持参しているはずもない。明日にも遠くに売り飛ばされる、そんな恐怖にかられるものもとりにあえず、目の前の川に飛び込んだのだ。

一般に、逃亡してつかまった奴隷は、他の奴隷たちへの見せしめに、鞭で打たれるのはもちろんのこと、焼けた「こて」で焼き印を押されたり、動くとき音がするように鈴のついた重い木杵を両肩につるされたり、あるいは体の移動そのものを不自由にする鉄球や鎖などの刑具をつけられた。体の一部を切り取ってしまう、むごたらしい罰もあった。つかまえられた奴隷が、あとにまつている刑罰を苦に、自殺をすることもあった。

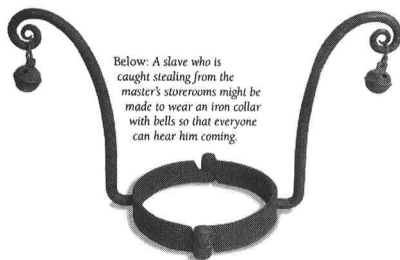
小説『ハックルベリー・フィンの冒険』の時代設定の直前に当たる一八三一年、ヴァージニア州で、ナット・ターナー（一八〇〇—一八三一年、ヴァージニア生まれの奴隷、敬虔なクリスチャンで、幾度か神の「お告げ」を体験したという）率いる六十人の奴隷たちが、四十八時間で白人五十五人を虐殺する前代未聞の大奴隷暴動がおこる。この暴動は南部白人たちにとってショッキングな出来事だった。奴隷制度とは、黒人たちに対する非人道的な仕打ちでは決してなく、黒人種という劣等な人種に高度な文明の恩恵をほどこすのに、もっとも適した社会の仕



図版2 鞭で打たれる (Charles Ball And American Slavery, 1993, Raintree Steck-Vaughn)



図版3 手かせ、足かせ (Daily Life on a Southern Plantation 1853, 1997, Puffin)

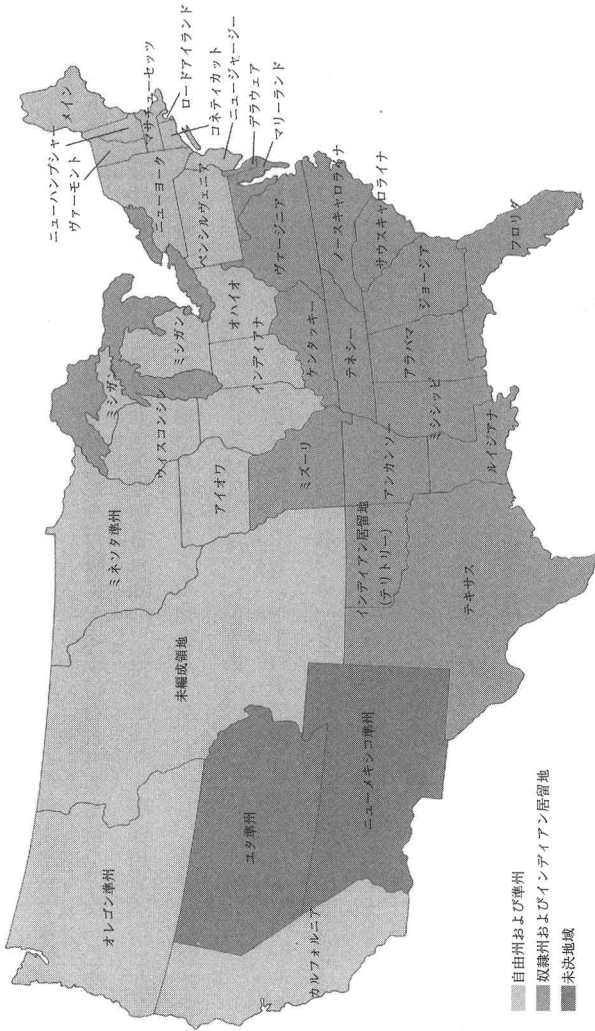


Below: A slave who is caught stealing from the master's storerooms might be made to wear an iron collar with bells so that everyone can hear him coming.

図版4 音のでる首輪 (Daily Life on a Southern Plantation 1853, 1997, Puffin)

組みであり、聖書にも奴隷が出てくるように、神もまたこの制度を認可なさっている——そんな彼らの信念は、実のところ彼ら自身、心の奥底ではそう恐れていたように、何ら根拠のない、彼らがそう信じていただけのただの絵空事だった。この事件がそれを無残にあげき立ててしまった。以降、奴隷たちのどんな行動にも過敏にならざるを得なくなった南部白人たちは、コミユニティごとくにパトロール隊を組織し、監視をより一層強化することとなる。もちろんその後も逃亡を企てる奴隷たちはあとをたたなかつた。しかし、それは奴隷たちにとって、まさしく決死の覚悟を要する企てとなったのである。

たとえ奴隷が「通行証」をもっていたとしても、かまわず捕獲して深南部のプランテーションに売りつける「奴隷強盗」と呼ばれる物騒な集団も現れた。作品冒頭部で、ジムは八百ドルで売り払われそうになり、作品の終わり近くでは性格のよさも加味されて千ドルの価値があると評価され直す。奴隷とは、南部白人たちにとって、欠くべからざる生産手段であるばかりでなく、所有していることがステータスシンボルとなるほどの資産価値があつた（ちなみに、トウエインの父親も、赤貧にあえぎつつ、それでも南部生まれの紳士の証として、生涯奴隷を手放さなかつた）。その価値に目をつけた奴隷強盗たちは、ひとりうろろしているような奴隷をつかまえて、働ける奴隷なら何人でも高い値段で買い取るようなミシシッピ下流の巨大農園に売り飛ばすのである。小説の舞台はマーク・トウエインの生まれ故郷ミズーリ州近辺であ



図版5 19世紀中葉の「奴隷州」と「自由州」の分布を示したアメリカ地図 (Daily Life on a Southern Plantation 1853, 1997, Puffin)



るが、こういう奴隷強盗は、そのミズーリやイリノイなどの州を含む、南部の「奴隷州」と北部の「自由州」がきびすを接するあたりで、もつとも暗躍していた。

また自由州に到達できれば、奴隷はすぐにでも自由になれたわけではなかった。もしそうだとすれば、ミズーリのミシシッピ川をはさんで対岸は自由州のイリノイなのだから（前ページのアメリカ地図を参照のこと）、川に飛び込んで向こう岸まで泳いでわたれば、どの奴隷も自由になれることになる。しかし、奴隷がまんまと自由州に逃げのびたとしても（それ自体、ごくまれなことだったのだが）、一七九三年に制定された「逃亡奴隷法」によって、たとえばイリノイ州では、黒人が自由身分であることを証明する証書を提示できなければ、これを逮捕し、持ち主がひきとりにくるまで労役に処することになっていた。持ち主が現れなければそのまま川下の大農園に売られることになっていた。この物語は時代を一八三〇～四〇年代に設定しているが、直後の一八五〇年には、さらにきびしい逃亡奴隷法があらためて制定されている。

ジムが逃亡を企てたこの時代、南部奴隷州政府は北部自由州における奴隷制度廃止主義者の政治的勢力の拡大——ここに大きな役割を果たしたのが、ハリエット・ビーチャー・ストウ（一八一―一八九六年）の『アンクル・トムの小屋』（一八五二年）であり、かのリンカーン大統領が彼女のことを「この大戦争を引き起こした本をお書きになった小さなご婦人」と呼

んだように、南北戦争とは、つまるところ、奴隷制度の撤廃か存続かをめぐる戦争だったのである——に相当神経質にならざるを得ない時代、あるいは奴隷のいかなる不穏な活動も見のがすまいと、全白人による総監視体制がちょうど確立した時代だったのである。

そこでハックとジムのふたりは一計を案じた。移動は日中を避け、ミシシッピ川がオハイオ川と合流するケアロという場所までいかだで南下し、そこでいかだを捨て、今度は蒸気船でオハイオ川を北上、奴隷制度のない自由州へ——移動手段がいかだしかない彼らにとつて、唯一実効性のありそうな計画だった。オハイオ州に入れば、奴隷制度廃止主義者、クエーカー教徒、さらに自由黒人たちによって、奴隷の逃亡を援助するために非合法に組織された、いわゆる「地下鉄道」があるだろう。この「地下鉄道」の指揮をとった有能な「車掌」のひとりに、ハリエット・タブマン（一八二〇—一九二三年）という黒人女性がいた。マリーランド州生まれの奴隷だった彼女は、みずから脱走を企て成功し、加えて、一八五〇年以来、自分のふたりの子どもと妹を皮切りに、南北戦争までの十年間に、二十回も南部に潜入して、およそ三百人の奴隷の逃亡を助けた実績をもっている。もしうまく「地下鉄道」を利用することができれば、ジムは自由黒人が多く住むシカゴから、さらに到底奴隷狩りの手のとどかないカナダにまで逃げ切る望みさえある。

しかし、もちろん計画はうまく運ばない。運ばないからこそ「冒険」である。そして

「冒険」の行く先に、トウエインによって意図され、私たち読者の期待するハック・フィンの成長がある。南部の子ハックの、自由アメリカの子への変貌が待っているはずだ。

いかだの上の自由と陸の上の「自由」小説『ハックルベリー・フィンの冒険』には、奴隷制度の存在に必然的にまといつく、暴力と不合理に彩られた南部習俗が、次々と暴き出される体裁が備えられている。したがって、そのただなかを貧乏白人の少年と逃亡奴隷の二人組みを通して作家の意図は、おのずと明らかである。人種差別主義に立脚した奴隷制度というものが、南部のすべての習俗の根底にある以上、このふたりの存在はそれに対するアンチテーゼとなることを期待される。確かにふたりの間には、「人種間には架橋し得ない差異が存在する」という文化的フィクションあるいはイデオロギーを、なしくずしにしてしまうような関係が成立している。

しかしながら、ふたりの人種差別を超越した関係は、ごく限られた条件においてのみ機能することは、作品から明白である。ハックは、とにかく社会という窮屈なものから脱出したと願う、南部白人社会の底辺に生きる貧乏白人の少年であること。ジムは奴隷として逃亡という「反社会的行動」を取り続けていること。しかも、彼らに唯一残された交通手段が川の流れに身をまかせ、南に下るしかないいかだであること。このような条件が絡み合って作

り出す、不自由で不自然な条件下にあつて初めて、ふたりの特殊な関係は生まれる。言いかえれば、作品のタイトルにもある「冒険」という状況が持続することが、ハックとジムの類いまれな関係が成立するための必要条件として存在していることになる。

もちろん、ふたりが内在的のもつている資質——つまり、ハックは南部白人通有の、黒人に対する優越感や体面といったものから比較的自由的な、奴隷からも素直に教えを乞うことができるような、言わば白人らしくない白人であり、ジムはいわゆる「奴隷根性」から解放された、だからその意味では決して南部白人の心の中にある「黒んぼ」のステレオタイプ＊には合致しない、知性と慈愛と威厳を兼備した人物であるということ——もこの関係に貢献している。しかし、こうしたふたりの内的な資質という十分条件は、「冒険」という必要条件が成立している状態、つまり、一種の危機的状況にふたりが立たされるときに初めて有効に機能する。このことはそれぞれがパートナーを換えた場合に、ふたりの間にあつたような関係が反復されないということからも証明される。たとえばトム・ソーヤーに対してジムはいつもどこか及び腰だし、旅の途中に出会う他の奴隷たちへのハックの接し方は常にどこか嘲弄的で乱暴である。

しかし、「冒険」はいつまでも続くわけではない。そして、小説はいつか終わらなければならぬ。第一、彼らは依然としてミシシッピ川を南下し続けているのだ。ケアロでいかだ

## コラム——基礎術語

ステレオタイプ (ステロタイプ) 「紋切り型」と訳される。ある特定の社会的背景を抱えた集団を、それとは別の集団の構成員がひとまとめに認識する際、相手の集団と自集団の間にあつた政治的・歴史的関係に由来するような偏向がかかるのが一般である。その偏向の結果植えつけられる、他グループの構成員の全体的イメージのことを「ステレオタイプ」と呼ぶ。実際に対面している他グループの構成員のひとりが、そのイメージからかけはなれていても、そのひとりが所属しているグループの全体的イメージが、その人そのものの固有性より優先され、目の前にある固有性が剥奪されることさえある。たとえば高度成長期の日本人は「めがねをかけ、首からカメラをぶらさげ、どこにも首を突っ込んでくるくせに、どこにも同化しようとはしない」云々とイメージされていた (今はどうなのだろう?) が、当時の日本人の誰もがそうだったわけではないだろう。ステレオタイプというのは、自分の知らない他者を認識する際、その取っ掛かりに訪れる少々乱暴な区分の方法のことで、その他者に対し、それ以上に認識を深めることをしないで、その乱暴な区分にしたがつてひとまとめに彼らを処遇し、その認識を顧みることもないとすれば、そこからいわゆる「差別」というものがはじまることになる。

を捨てて、蒸気船でオハイオ川を北上するという、唯一実効性がありそうな計画——といっても、貧乏白人の少年と逃亡奴隷の二人組みが蒸気船で旅をするというのも、そうやすやすと完遂できるプランには思えないが——が頓挫してしまつた以上、どこかでいかだを捨て、岸に上陸しなければしょうがない。いくらアメリカ最長の川といつても、ミシシッピは永遠に続いていくわけではないからだ。

さらにいかだの上だろうと、どこだろうと、社会の窮屈さから逃れていられればよいハックが求める類いの自由とは違って、ジムの「自由」は、最終的には陸の上の社会の内部においてしか達成されない「自由」である。アメリカの理想としての神話的自由は、大河に浮かぶちっぽけないかだの上につかの間だけ結ぶ、はかない夢だった。ふたりの人種を超越した関係もまた、いかだに乗って冒険を続けている間だけ生き続けることができる、刹那的で社会的リアリティを欠いた種類の関係であった。いかだの上以外でその理想的関係は成立し得ない。しかし、もはやジムと一蓮托生の決意を固めたハックは、陸の上で達成されなければならないジムの社会的・政治的自由に抜き差しならぬまでにかかわっている。

だから彼らは陸の上上がり、社会のリアリティにあらためて直面しなければならぬ。小説を終わらせるためにも、ここはもう一度彼らを陸に上げ、これまでいかだの上で作り上げた人種差別の超越という神話的幻想をできる限り損なわぬよう、そこに社会のリアリティをそっと引き戻さなくてはならない。トウエインが用意した解答は、その神話的関係の陸上における崩壊は避けられない宿命であるから、その関係によって期待される結末だけは確保するということだった。つまり、陸に上がったのち、ハックとジムはもとの「常識」的南部白人と南部奴隷に返るが、少なくともジムは自由な身分を得るといふ苦肉の策である。

社会のリアリティのメッセンジャーには、ジムを追ってきた奴隷狩りの大人ではなく、故

郷セントピーターズバーグからやってきたハックの友人、トム・ソーヤー少年が抜擢される。トムは自分が組織する少年ギャング団には「まっとうな」ものしか参加させないとか（一章）、奴隷からスイカを「拝借した」ハックを「それは泥棒と言うんだ」とたしなめる（三十五章）程度に、「健全な」市民性を保有している。トムは頭の凝り固まった南部の大人ではなく、想像力豊かで、好奇心旺盛で、しかし、同時に適度に社会的な少年であると言える。

しかもトムは、ジムが持ち主の遺言によって法的に解放されたという事実のメッセンジャーでもあった。だがトムは、「ジムをどうしても逃がしてやりたい」という切なる願いをハックから聞かされて、そこに千載一遇の「冒険」の機会がころがっているのを見いだし、ジムはすでに自由の身であることをあえて隠して、ジムとハックを自分の演出する脱走劇に巻き込んでしまう。トムの「冒険」とは、ハックとジムの冒険とは違い、始まりと終わりがあらかじめ決まっていて、その間の「自由」、つまり「遊び」を存分に味わうのが目的の冒険「[ごっこ]」である。確かにトムがリアリティのメッセンジャーであれば、本来は白々しく冷たい現実を、スリルと哄笑の渦に巻き込んでくれるかもしれない。実際、トムが登場してから、物語のトーンは「バースク」と呼ばれるドタバタ喜劇のそれに急変する。そしてその間、ジムはあの威厳に満ちた人格をいかだの上にすっかり置き忘れてきたかのように、白人トムの言いなりとなり、南部白人の抱くステレオタイプどおりの「黒んぼ」に返ってしまう。

作品結末部でトムが演出する荒唐無稽の喜劇は、ハックとジムが作り上げてきた切実でかけがえのない関係の終焉を見送る、あまりにも陽気で騒々しい葬送行進曲なのだ。

事後、トムは、ジムに「脱走ごっこ」のピエロ役を演じさせたお詫びに、四十ドルの褒美を与える（最終章）。ハックとジムのいかだの上で生まれた美しくもはかない関係は、トムによって四十ドルで購われることによって、社会のリアリティの諸相のなかにまぎれ、霧消してしまふ。四十ドルをもらったジムがハックに向かって、「ほら見な、おらが言つた通り、おらあまた金持ちになつただろうが。しるしはしるしだ、わかつたけ、ハック」と無邪気に喜んでいる様子に、かつていかだの上で彼がハックに見せた父親的な威厳はみじんもない。しかし、とにかくジムはこれで自由な身分にはなつたのである。

トム・ソーヤーが彼のとりしきる脱走劇を“*evasion*”と呼ぶのは、この間の事情を皮肉にも言い当ててしまつていて興味深い。古い冒険ロマンスにかぶれたトムによれば、身分の高い囚人の脱走はただの「脱走（“*escape*”）」ではなく、“*evasion*”と格式のある語で呼ばなければならないのだそうだ（三十九章）。しかし、この英語の単語には「逃奔」ないし「逐電」というトムが言おうとしている意味の他に、「逃げ口上」とか「言い訳」という意味もある。ハックとジムの間の人種を越えた関係、つまり、南部習俗の根底にある人種差別主義へのアンチテーゼとしての関係が、陸に上ることによつてもはや消滅している以上、結局「黒ん



「ぼ」になりさがってしまったジムを自由な身分にしたところで、それはトムが支払う四十ドルの金と同じ「逃げ口上」に過ぎないのではないか。どんな形であれ、結果的にジムは自由になるのだから、ジムとハックのいかだの上の関係が、今はもう読者の記憶のなかに命脈を保つのみであったとしても、決してそれは無意味なものではなかったのだとも言おう。な、「言い訳」に聞こえるではないか。結局、ジムを自由にしたのは、トムの「脱走ごっこ」でないの言うまでもなく、ハックの健気な献身でさえなく、生前のおこないを恥じたというミス・ワトソンの遺言であるにすぎない。では、延々と引き伸ばされ、ジムにその間ずっと屈辱の忍従を強いたトムとハックの脱出劇とは、それが小説を終わらせるための騒々しい「逃げ口上」や「言い訳」でなかったとしたら、他にいったいどんな意味をもっていたのだろうか。

「テリトリーへ逃げる」そしてそれらの「逃げ口上」と「言い訳」とどめをさすのが、「おらあ一足先にテリトリーに行かなくちゃならねえ」というハックの、「テリトリー」という名のインディアン居留地（二九〇頁のアメリカ地図参照）への逃亡の決意である。ハックは自分がそのテリトリーに逃亡する理由を、せっかく逃げ出してきた大人の世界、面倒くさい約束事の社会に、また連れ戻されるのはかなわないからだと言っている。ハックの冒険は、彼

を「養子にして教育しようと思つている」ダグラス未亡人からの脱出から始まった。だとすればこの結末は、そもその始まりである小説の発端の場面に回帰することで、作品に一種の神話的な循環構造を与えようとする作家の意図に由来するのかもしれない。そうすると、またハックの新たな冒険が始まり、次は黒人奴隸ではなく白人によってテリトリーに強制移住させられたインディアンと、ふたたび冒険の時のみに有効な、人種を越えた関係を結ぶことになるとでも言うのだろうか。

実際にマーク・トウェインは一八八四年の中頃、『ハックルベリー・フィンの冒険』のゲラ刷りを読みながら、これもハックを語り手にした、彼自身とトムとジムのインディアン・テリトリーでの冒険を書き始めていた。しかし、未完に終わった「ハック・フィンとトム・ソーヤー、インディアンに囲まれて」を彼が執筆し始めた主要な理由は、ジェイムズ・フェニモア・クーパー（一七八九—一八五一年、「アメリカ小説の父」と称され、白人ながらインディアンに育てられたナティ・バンポーを主人公とする人気シリーズ「革脚絆物語」の作者として知られる）の『最後のモヒカン族』などを通じて大衆化された「高貴な野蛮人」としてのインディアンのイメージが、いかに事実無根かを示すことにあつた。トウェインはこの作品で、白人がインディアンのかなかにロマンティックでヒロイックな自然児像を見出そうとする発想や、インディアンとの間に人間的な友好関係を持つとうとする試みが、インディアンの残虐かつ非人間的な行

為によつてもろくも打ち崩されてゆく様子を描いている。たとえば、ハックがほのかに恋心を抱いている西部移住民の娘ペギー（彼女はトウエインの妻オリヴィア・ラングドンを思わせるような、純粋で愛情あふれる女性に描かれている）は、インディアンによつて地面に刺した棒杭に手足を縛りつけられ、無残に凌辱されるのだ。

では、この未刊の作品でジムはどう描かれていたか。残念ながらジムは、いかだの上のあの威厳と慈愛に満ちたジムではなく、トムの仕切る脱走喜劇中のジム、常に白人の都合に合わせてものを考える従順で愚鈍な、いわゆる「黒んぼ」である。ハックとトムとジムの三人組が登場する作品は、これ以外に『トム・ソーヤー外遊記』（二八九四年）、未完の「トム・ソーヤーの陰謀」（二八九七—一九〇二年？）があるが、どちらの作品のジムもふたりの少年の冒険劇の愚かで滑稽な端役に過ぎず、少年の残酷な好奇心のおもむくままに命の危険にさらされる。『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末が循環構造をもつているとするなら、循環して行きつく先は、いかだの旅以前の故郷セントピーターズバーグの状況、つまり、黒人奴隷に暴力的に強要された従順と自己卑下という犠牲の上に成立している見せかけののかさなのではないか。

しかし、ハックは故郷セントピーターズバーグに帰るのではなく、自分は「テリトリーに逃げるのだ」と言っている。ハックはいかだの上で、ジムとの間に南部的「常識」をくつが

えすような関係を結びながら、上陸とトム・ソーヤーの登場によって南部社会のリアリティが——川を下る旅の途中、その絶望的な光景を幾度となく目にした南部社会の現状が——またぞろ復活してゆく現場に身をおき、むしろその「常識」に以前と同じように従おうとしている。トウエインとしては、ハックの偏向のない透明なまなざしを通じて、南部社会の病弊を批判するという着想を得てそれを作品化しながら、執筆時にも依然として存在していた人種差別という〈南部〉問題に関して、非現実的な、刹那的な、あるいは神話的なヴィジョンを提示することによってしか、それに対する批判の方法を見出せなかった。作品の終わりにハックの今後の身の処し方を考え得るとすれば、それは南部とその習俗からの逃亡、「テリトリー」といういまだアメリカではない、無論南部でもない土地への逃避しかなかったのではないか。南部的人種差別のアンチテーゼとなり得る「自由と平等のアメリカ」の少年が、ふたたびもとの南部少年に戻ってしまうのを見送るより、現実の問題をそっくりそのままあとに残したとしても、彼を南部から撤退させる道を選ぶしか方法はなかったのではあるまいか。

実は、「テリトリーへの逃避」というこの結末は、作家トウエインが——いや、「マーク・トウエイン」とは南北戦争につけた筆名であるから、人間サミュエル・クレメンズが、と言うべきだろう——経たひとつの伝記的事実と奇妙に符合している。作品の舞台セントピー



図版6 小説『ハックルベリー・フィンの冒険』執筆中のトウェイン (Mark Twain: An Illustrated Biography, 2001, Alfred A. Knopf)

ターズバーグとは彼の生まれ故郷ミズーリ州ハニバルを忠実に模している。つまり、トウェイン、いやサム・クレメンズは、南部人であり、彼の幼く柔らかな心に刻み込まれたのは南部の空気だった。彼の原風景とは、奴隷がいるのが当たり前前の風景だった。奴隷制度とは、神聖侵すべからざる存在であり、これに敵対するものから死守されなければならぬ、そんな土地に彼は生まれ育った。奴隷所有者の父母をもったクレメンズは、南北戦争が起こったとき、

南北の境界に位置するミズーリ州にあつて、南軍方の義勇兵として従軍することを決意した（ちなみに彼の兄オーリオン・クレメンズは、いち早く戦前にリンカーン政権支持を打ち出していた。自由州に隣接したミズーリは、そういう政治的自由もあつた州なのだ）。しかし、彼は戦場というもつとも南部人としての自己認識を迫られる現場から、一八六一年、戦争が始まつてもまもなく、西部辺境の地、ネヴァダに逃げ出した。ネヴァダはそのころ州として正式に合衆国に編入されておらず、「準州」の地位にあつた。準州は英語で「テリトリー」と呼ばれる。つまり、トウエインは、ハックと同じように、「テリトリー」に逃亡したのだ。

ハック・フィンという、南部的拘束からアメリカ的自由へ、南部的頑迷からアメリカ的寛容へと転身を図ろうとする登場人物は、トウエインの、いや、まだユーモア作家「マーク・トウエイン」に変身する以前のサム・クレメンズの、南部からの脱出の道程をそっくり踏襲している。ここに起こっていることはどういふことだろう。南北戦争中の一八六一年のクレメンズと、戦後二十年、一八八五年に出版された小説の主人公ハックの場合、いずれも〈南部〉から「テリトリー」への逃亡でありながら、両者はおのずとニュアンスが異なっている。クレメンズによる戦中の逃亡は、自分自身の死やあるいは戦争そのものへの恐怖に根ざした、文字どおり無我夢中の逃亡だっただろう。やがて戦争が終わり、南北の雌雄が決した。結果、南部は自由主義国家アメリカに反逆し、因果応報に敗れた「逆賊」の汚名を受け、歴史

に呪われた土地となった。つまり、舞台を南北戦争前に設定している戦後小説『ハックルベリー・フィンの冒険』の主人公の南部からの逃亡とは、言わば戦後の読者が健気な主人公に期待するとおりの正しい逃亡、反アメリカ的な邪悪な土地からの言祝ぐべき脱出、アメリカの正史が支援する亡命と呼ぶことができるだろう。

戦後、国民作家としての地位に昇りつめようとしていた小説家マーク・トウエインが、故郷と戦場からの逃亡という過去の自分自身の行為——そこに何ら責めるべき政治的な変節を認めることができずとも、あるいは倫理的にとがめだてする筋合いのものでさえないのだとしても、少なくとも南部人としては不名誉と呼ぶべき行為——を、ハック・フィンにもう一度たどらせたのは、自分自身の過去を、無垢な少年ハック・フィンに仮託することで、浄化しようとする意思があったからなのかもしれない。あるいは、そこには、敗北に呪われた南部に生まれ落ちたクレメンズの逃れがたい過去から、あらためて正義と勝利の国アメリカの人、国民作家マーク・トウエインへの宿命転換の祈願が込められていたのかもしれない。